

学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘は、いちどしかひらかない



八戸市立
小中野中学校
平成30年9月28日(金)
No.131 文責：校長
工藤聡

もふもふ

先日の新聞（全国紙）に次のような記事が掲載されていました。

犬や猫、ウサギ、アルパカ…。動物の豊かな毛並みの様子を、「モフモフしている」と表現しているのを見たことはありませんか？毛足の長い動物をなでることを「モフる」、動物そのものをさして「モフモフ」と呼ぶこともあるようです。

いかにも柔らかそうな雰囲気のあるこのことば、書籍の国語辞典にはまだ見当たりません。一方で、NHKでは動物番組のタイトルとして使われたり、SNSでは動物の写真に添えられていたり、何かと目にする機会が増えています。

ことばが人に与える印象について研究する電気通信大教授の坂本真樹さんによると、モフモフが使われるようになったのは2000年代に入ってから。10年あまりであっという間に広がったそうです。「音の響きそのものが、それまで使われることの多かった『フワフワ』と『フサフサ』よりも優しく、あたたかいのが特徴。柔らかさを表すだけではなく、対象への愛情をこめて使われることが多いのでは」（中略）

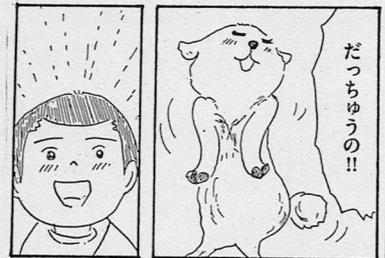
モフモフのような新しいことばが作られる背景には、既存（キソン：以前から存在すること）のことばでは言い表せない、自分が感じているままの感覚を相手に伝えたいという、ことばの使い手の強い思いがある、と坂本さん。

「新しい表現が受け手の『そうそう。まさにそんな感じ』という共感を生むと、たくさんの人が使うようになる」。モフモフは動物の毛という具体的な手触りのあるイメージと結びついたことで、共感が生まれやすくなったのではと指摘します。

私が購入しているマンガ誌に、森栗丸という人の「もふもふ」という漫画が掲載されています。おばあさんに飼われている犬の“ユカリン”が、いろいろな人の心を癒し（イヤス：悲しみや苦しみを和らげること）してくれるというストーリーのもので、また、NHKの総合テレビでは、毎週木曜日の午後10時25分頃から、「もふもふモフモフ」というバラエティ番組も放送されています。ですから、ほんの小さな記事であったにもかかわらず、『もふもふ』という表現が目についたのだと思います。ただ、私がみなさんに言いたいのは、下線を引いた部分です。

みなさんは、何げなくいろいろな言葉を使っています。しかし、それはみなさんが思う以上に、周りや自分自身に大きな影響を与えているのではないのでしょうか。たとえば市中体の大会で「頑張れ！」と応援し、選手もその声援に応えようとします。ましてや、自分たちが普段使っている言葉は、行動に確実に影響を与えています。それは、自分が発するわけで、誰よりも自分が一番聞いているからです。どういう言葉を使うかで、その後の行動が変わってしまう可能性だってあるのです。心理学者が行った実験によると、ネガティブな単語が含まれる言葉を言っていると心の余裕がなくなるというのです。逆に、自分の目標に向かって前進するためには、ポジティブな言葉を使うことが大切なようです。さらに、自分に対するポジティブな語りかけをできるだけ頻繁に行うと、すればするほど楽しい気分になるらしいのです。今は小中野中にはいないと信じてますが、「死ぬ」という言葉をはく人もいます。それを言えば言うほど、自分の心も暗くなったり、殺伐（サツバツ：うるおいや温かみの感じられない様子）としてしまうわけですから、いいことは何もありません。「ありがとう」というような感謝の言葉は、周りも明るく和やかにしますが、自分自身をもいい方向に導いていることになるのだと私は思います。

「もふもふ」は、何となく温かくて優しいです。そんな言葉にあふれた小中野中であれば…と心から願わずにはいられません。



ひとり言特集「人とのつながり編」

今日は、「人とのつながり」というタイトルで、私のひとり言を特集します。

●バレーボールの県大会が11月3・4日に五所川原市を主会場に開催されます。男子バレーボール部も出場しますが、日程の関係で、前日から五所川原市に入ります。当然、前日も練習した方がいいので、顧問の戸来先生には「私がさがすよ」と言いました。実は、五所川原工業高校の校長が高校時代の同級生で、しかも卓球部でダブルスを組んでいたパートナーでした。去年も、県大会に出場した野球部に、五所川原工業高校の室内練習場を貸してくれました。今回も依頼すると、すぐに折り返しの電話がきて「うちの体育館でどうだ。」ということでした。五所川原工業高校の男子バレーボール部は、大変な強豪校（昨年県中体で優勝し、東北大会に出場した稲垣中のスタメン全員が進学しています）で、その日はちょうど県外遠征に出かけるということで、体育館があいていたのです。しかも、普段は一緒についていくマネージャーを準備のために残しておくというのです。本当にありがたいことです。高校を卒業して42年ですが、今でもこうしたやり取り（頼んだり頼まれたり）ができることが幸せだと思います。みなさんも、学級や学年の仲間、先輩・後輩とこのような付き合いが、何十年後にもできればいいと思います。

●2週間ほどたってしまいました。市中体秋季大会の時には「こうやって競技会場をまわるのも最後だなあ…」と若干感傷にひたりながら（カンショウニヒタル：物事に感じやすく、少し悲しんだりもすること）各会場でみなさんの戦いぶりを見ていました。保護者の皆様など、いろいろな方々から声をかけていただいたのですが、なかでもうれしい出会いが二つありました。一人は、白銀南中の時の生徒で、およそ25年ぶりでした。中学校の同級生と結婚されて、お子さんが白銀南中のバレー部の3年生なのだそうです。子どもさんに頼まれて、後輩の結果を見に来たということでした。小中野中と同様、白銀南中も実力テストで応援に来ることはできないのですが、気になって気になって仕方ないので、お母さんをお願いしたらしいのです。「子どもが出るわけでもないのに、わざわざ見に来たんですよ」と言うので、「そこまで後輩の勝敗が気になるのは、素晴らしい先輩なんだよ。決勝に進出したらしいけど、そういう後輩を育てたのは、〇〇の娘さんだということも言えるでしょ」という私の言葉に、笑顔で帰って行きました。私に声をかけて来た方はもう一人は、東中で私が学年主任をしていた時の生徒（現在27歳）の妹でした。私の隣に駐車していた車の運転席にいたきれいな女性が、私をしばらく見ていたので、何か失礼なことでもしたかなあと思っていたら、5秒くらいの間があった後に車から降りて来て「もしかしたら、工藤先生ですか？」と話しかけてきました。話を聞くと、私の学年の生徒が3年生の時の1年生だったらしいのですが、たぶん私とは会話をしたことがないと思います。「お母さんが、時々工藤先生のことを言っているの、思わず話しかけてしまいました」ということでした。しばらく話をして、私の学年だった生徒は千葉県で建設業で働いていること、まだ結婚していないこと、自分もバレーボール部だったので、従姉妹の試合を見に来たことなどを話してくれました。一人は25年ぶり、もう一人は生徒の妹とはいえ、話したこともないのに話しかけてくれたことで、何となく心が温かくなりました。この話を家族にすると「お父さんは太っていて、しかもサスペンダーをしているから、いつでもどこでもわかるから」とともに、「何年もたっていたり、直接指導した生徒でもないのにありがたいねえ」と言っていました。どうつながっていくかわかりませんが、人とのつながりは大事にしたいとしみじみ思った一日となりました。

●やはり市中体秋季大会の時のことです。ある競技の応援に行くと、通路をはさんだ私の隣に、お母さんと一緒に小さいお子さんが来て座りました。そこは小中野中の応援席でしたので、誰かの妹だと思って聞くと、やはり本校の生徒と姉妹でした。保護者参観日や学校行事の時に、小中野中に保護者の方と一緒に来たちびっ子には、お菓子やヌイグルミをあげることにしています。中学校をコワイ所だと思っている子どもさんもいるらしいということを聞いたことがあって、「いいところだよ」と思ってもらいたくて始めたことでした。東中の学年主任だった頃からですから、15年以上になります。私の家族に言わせると、「物で小さい子どもをつっている（ツル：相手の気にいるようなことをして、こちらの望みどおりの行動をとらせること）」ことになるのですが、私としては小さい子が喜ぶ顔を見たいだけなのです。ですから、秋季大会の時も「今度、中学校の校長室に来てね。ヌイグルミあげるよ」と言いました。一昨日、本校の生徒であるお姉さんにそのことを言ったところ、家で妹が話していたというのです。そこで、校長室にあったヌイグルミ3つのうち、1つを選ばせて持たせてやったところ、その子本人から昨日お礼の手紙をもらいました。私の似顔絵とヌイグルミを描いたものも同封してありました。気持ちがほのぼのとして、何とも言えない気分になりました。生徒の妹ではありますが、あまり接点はありません。でも、何かのきっかけで、お互いが「いい気分」になります。そういう関係が次々に生まれていくのが、人と人とのつきあいではないでしょうか。その手紙には、「ヌイグルミを大切にします」とありましたが、私の方こそ手紙を宝物にします。ありがとうございました。

●今日の私の似顔絵は、もちろん生徒の妹さんに描いてもらったものです。鼻がヌイグルミのようになっていて、しかも周囲を赤いハートで囲んでくれました。最高に気に入っています。

くじろ校長先生へ

おはようございます。お母さんと一緒に小さいお子さんが来て座りました。そこは小中野中の応援席でしたので、誰かの妹だと思って聞くと、やはり本校の生徒と姉妹でした。保護者参観日や学校行事の時に、小中野中に保護者の方と一緒に来たちびっ子には、お菓子やヌイグルミをあげることにしています。中学校をコワイ所だと思っている子どもさんもいるらしいということを聞いたことがあって、「いいところだよ」と思ってもらいたくて始めたことでした。東中の学年主任だった頃からですから、15年以上になります。私の家族に言わせると、「物で小さい子どもをつっている（ツル：相手の気にいるようなことをして、こちらの望みどおりの行動をとらせること）」ことになるのですが、私としては小さい子が喜ぶ顔を見たいだけなのです。ですから、秋季大会の時も「今度、中学校の校長室に来てね。ヌイグルミあげるよ」と言いました。一昨日、本校の生徒であるお姉さんにそのことを言ったところ、家で妹が話していたというのです。そこで、校長室にあったヌイグルミ3つのうち、1つを選ばせて持たせてやったところ、その子本人から昨日お礼の手紙をもらいました。私の似顔絵とヌイグルミを描いたものも同封してありました。気持ちがほのぼのとして、何とも言えない気分になりました。生徒の妹ではありますが、あまり接点はありません。でも、何かのきっかけで、お互いが「いい気分」になります。そういう関係が次々に生まれていくのが、人と人とのつきあいではないでしょうか。その手紙には、「ヌイグルミを大切にします」とありましたが、私の方こそ手紙を宝物にします。ありがとうございました。